【 論文 】

学校支援活動が教育学部生の教師としての職務内容と役割に関する理解の深まりにもたらす効果の検証

望　月　耕　太

静岡大学教育学研究科後期３年博士課程

要約

本研究の目的は、大学在学中に学校支援活動に参加することが、学生の教師としての職務内容と役割に関する理解の深まりにもたらす効果を明らかにすることである。研究方法は、活動記録の分析と質問紙調査である。調査対象とした学生は、教育学部に所属しており、小学校における学校支援活動に継続的に参加している。その学生は毎回の活動後に、活動記録を記すことになっている。活動記録の分析では、記録されている記述量や内容の変化を調査した。質問紙調査では、学生に教師の職務に対する意識（教師志望の有無、教師志望の変化の過程、教師の職務に対する考え方の変化）、教師の職務内容の理解に役立った事柄（学校支援活動、大学の授業、大学の授業外の活動）について尋ねている。

以上の結果、学校支援活動に継続的に参加することは、学生に教師としての職務内容と役割の理解を深めさせる効果があることが分かった。また、学生は学校支援活動における体験を通して学び得たことと座学によって学び得たこととを関連づけており、そのことによって教師の職務内容や役割に関する理解を深めていることが明らかになった。

キーワード

体験的な学習、学校支援活動、教員養成、大学生、職能成長

１．問題及び目的

(1) 背景

相次ぐ教師の不祥事や体罰問題など、毎日のように教師に関係する問題が新聞やテレビで報じられている。教師にとっては、風当たりの強い時代になっており、社会全体が教師に対する不信感に覆われていると言っても過言ではない。教師の資質を問い、なおかつ力量を高めるために教員免許更新制が実施されたことは記憶に新しい。

このような教師に関わる不信感に対して、社会的な信頼を取り戻すため、現在、我が国では教師教育改革に取り組んでいる。教員養成改革に限って言えば、教員養成教育の高度化に関する議論が進んでいる。平成 24 年 8 月 28 日に中央教育審議会より出された「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」では、教員養成教育の修士レベル化に伴う教員免許制度改革、教員養成教育における教育委員会・学校と大学の連携・協働の強化など、今後の改革に向けたいくつかの方向性が示されている [(1)]。このような、教員養成改革が進められているため、教員養成教育の現状認識が急務の課題である。具体的には、現行の教員養成教育の取り組みを検証することであり、教員養成教育期間にある大学生の学びの現状を明らかにすることである。

このような、教育成果を検証し課題を示すことは重要であるが、これまで十分に研究が取り組まれてきたとは言えない。本研究ではこのような問題意識の下、教員養成教育期間における大学生の学びの状況を明らかにすることを目的にしている。その１つの試みとして、本研究では、大学在学中における学校支援活動への参加が、大学生の教師としての職務内容と役割に関する理解の深まりにもたらす効果を明らかにする。大学生の学校支援活動は、昨今全国の教員養成を行う大学で大きな広がりを見せている [1]。学校支援活動を含む実習活動に限れば、その効果を検証する試みがいくつかなされている。例えば、実習活動に取り組んだ学生が、自分の行動や判断について振り返り、自己の評価を行い、以後の活動の目標を設定していく試みとして、北海道教育大学の「チェックリスト」[(2)] や横浜国立大学教育人間科学部の「横浜スタンダード」に基づく「実習ノート』」[(3)] も挙げられる。また、弘前大学教育学部における実習活動に取り組んだ学生に対する質問紙調査 [(4)] やインタビュー調査 [(5)] が挙げられる。しかし、これらはいずれも教員養成期間の 4 年間を通した学習の成果を検証するものではない。

そのため、本研究では学校支援活動に参加することが、大学生の教師としての職務内容や役割の理解にもたらす

効果を調査するため、学校支援活動の活動記録の分析（調査１）を行う。また同時に、大学４年間の教育の成果を検証するため、卒業を間近に控えた大学４年生を対象に、教師の職務に対する意識調査（調査２）を実施する。

２．調査１（学校支援活動の活動記録の調査）

(1) 目的

学生が抱く教師の職務内容や役割に対する関心の経年的な変化を見ることによって、学校支援活動に参加することが学生の教師としての職務内容や役割に関する理解の深まりにもたらす効果を明らかにすることにある。

(2) 対象

平成 17 年度にＳ大学教育学部入学した８名（学生ⅠからⅧ）である。この学生たちには、大学の卒業要件として小学校と中学校の教員免許取得が課せられている。また、教員免許取得に関わる教育実習の大部分は、３年次の５月から６月にかけて行われている。

これらの学生はいずれも、在学中にＳ市立Ｆ小学校の学校支援活動に参加しており、学生Ⅰ、学生Ⅲ、学生Ⅴ～Ⅷは４年間、学生Ⅱと学生Ⅳは３年間の参加である。本調査では、学生が平成 17 年度から 20 年度の間に記した、活動記録を調査の対象とする。

Ｓ市立Ｆ小学校の学校支援活動は、学生が所属している専攻・専修の授業科目として実施されている。この活動の目的は、学生が実際の教育現場を継続的に体験し、教師の職務内容や役割を理解することや子どもの発達に関する知識を得ることである。学生は小学校のいずれかの学級を担当し、担当の学級の教育支援を中心に行う。学生達の標準的な過ごし方は、昼までに小学校に到着し、給食を終えた子ども達と校庭や教室で昼休みを過ごし、第５校時の授業、帰りの会、一部の者は居残り勉強を補助したり、提出物の整理や印刷等を手伝ったりして帰宅する、という流れである。活動内容は、授業の参観や机間指導、伴奏、示範、審判、その他教師の補助を中心に行い、一部では実質的な授業者役や小グループの指導を担当することもある。また、教育支援には、少人数指導の学習支援、特定の児童に対する個別指導も含まれる。

活動時期は毎年の 10 月から 12 月の期間であり、活動頻度は週に１度である。学生によっては、活動時間・時期を延長させたり、週に２度のように活動頻度を増やしたりすることなどもある。

(3) 方法

学生が毎回の学校支援活動後に記している、活動記録の記述量と内容の変化を調べる。内容の変化を見るために、毎回の活動記録の文章を１文ずつに分け、その各文を内容別に分類する。

分類には、OECD が示している教師の専門性の要件[(6)]と、米国の CCSSO（Council of Chief State School Officers）が作成した教員養成スタンダードの INTASC（Interstate New Teacher Assessment and Support Consortium）[(7)]と、英国の Department for Education and Employment の教員養成スタンダードの QTS（Qualified Teacher Status）[(8)]を参照し、作成した５つのカテゴリー（「教師の仕事内容や役割」「教科･科目」「授業に関する教育内容・計画」「子どもの発達・子どもとの関わり」「同僚・家庭・地域との連携」）を用いる。内容が複数のカテゴリーにあてはまる文については、あてはまるカテゴリーすべての内容として分類する。具体的な分類の仕方は、次の例の通りである。

分類の例（※活動記録部分は斜字）

例１

４時間目の授業のとき、R さんがなかなか割り算の筆算を解くことができず困っていたので、隣について教えることにした。

←「授業に関する教育内容･計画」と「子どもの発達･子どもとの関わり」のカテゴリーの両方に該当する。

例２

今日は担任の先生が配慮して下さったため、授業中に“先生”の役割で子どもと関わることが出来た。

←「子どもの発達・子どもとの関わり」と「同僚・家庭･地域との連携」のカテゴリーの両方に該当する。

(4) 結果

１点目は、学生の学年が上がるにつれ、記述量が増加する傾向にある。表１は学年ごとの毎回の活動記録の記述量の平均である。この表から１年次から３年次にかけて、学年が上がるにつれて記述量が増加している学生が５名（学生Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ）いることが分かる。また、２年次から３年次にかけて、すべての学生の記述量が増加しており、２倍近くにもなる者（学生Ⅶ）も見られる。

２点目は、記述内容に経年的な変化が見られることである。各カテゴリーの学年ごとの記述量の平均と記述全体における割合は、表２から表６に記している。

表1　活動記録の記述量の平均　（単位：字）

学生	1年次	2年次	3年次	4年次
Ⅰ	669.0	766.0	847.8	1150.0
Ⅱ	473.0	286.3	318.1	－
Ⅲ	251.6	378.0	439.7	490.3
Ⅳ	508.3	668.7	1026.2	－
Ⅴ	828.8	727.2	1035.6	848.5
Ⅵ	403.9	533.0	757.1	816.5
Ⅶ	584.1	675.0	1206.6	666.0
Ⅷ	357.2	353.7	685.8	756.0
全員	509.5	548.5	789.6	787.9

注　活動記録の結果をもとに作成しており、数値は小数第二位を四捨五入して計算している。

カテゴリーごとの記述量を見ていと、１つは表３と表４から分かるように、すべての学生が１年次から２年次にかけて「教科・科目」と「授業に関する教育内容・計画」に関する記述量の割合が増加している。本論では詳述はしないが、記述には担当の学級における教師の授業の計画や進め方に関する記述が見られた。２つは「子どもの発達・子どもとの関わり」に関する記述の割合が相対的に大きいことである。表５を見ると、ほぼすべての学生が 80％前後である。記述には、子どもとのやり取りに関する詳細な様子や子どもの対応に困った具体的な場面を記しているものが見られた。

３．調査２（教師の職務に関する意識調査）

(1) 目的

学生が抱く教師の職務に対する意識、学生が教師の職務内容や役割に関する理解を深めた体験の内容を明らか

表2 「教師の仕事内容や役割」に該当する記述量の平均とその割合

（単位：字）

	1年次		2年次		3年次		4年次	
学生	記述量(字)	割合(%)	記述量	割合	記述量	割合	記述量	割合
Ⅰ	29.3	4.4	11.8	1.5	11.3	1.3	0.0	0.0
Ⅱ	21.4	4.5	0.0	0.0	5.4	1.7	−	−
Ⅲ	29.9	11.9	0.0	0.0	12.8	2.9	0.0	0.0
Ⅳ	11.6	2.3	46.7	7.0	27.0	2.6	−	−
Ⅴ	79.8	9.6	98.5	13.5	61.7	6.0	135.0	15.9
Ⅵ	18.6	4.6	61.5	11.5	13.7	1.8	0.0	0.0
Ⅶ	4.9	0.8	13.4	2.0	7.3	0.6	0.0	0.0
Ⅷ	83.4	23.3	32.7	9.2	18.5	2.7	42.5	5.6
全員	34.9	6.8	33.1	6.0	19.7	2.5	29.6	3.8

表3 「教科・科目」に該当する記述量の平均とその割合

（単位：字）

	1年次		2年次		3年次		4年次	
学生	記述量(字)	割合(%)	記述量	割合	記述量	割合	記述量	割合
Ⅰ	26.0	3.9	19.8	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0
Ⅱ	31.6	6.7	0.0	0.0	0.0	0.0	−	−
Ⅲ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
Ⅳ	4.7	0.9	12.4	1.9	0.0	0.0	−	−
Ⅴ	0.0	0.0	56.7	7.8	0.0	0.0	96.0	11.3
Ⅵ	0.0	0.0	60.0	11.3	15.3	2.0	0.0	0.0
Ⅶ	0.0	0.0	23.6	3.5	7.4	0.6	0.0	0.0
Ⅷ	0.0	0.0	16.3	4.6	47.3	6.9	100.0	13.2
全員	7.8	1.5	23.6	4.3	8.8	1.1	32.7	4.1

表4 「授業に関する教育内容・計画」に該当する記述量の平均とその割合

（単位：字）

	1年次		2年次		3年次		4年次	
学生	記述量(字)	割合(%)	記述量	割合	記述量	割合	記述量	割合
Ⅰ	119.6	17.9	219.3	28.6	105.6	12.5	183.0	15.9
Ⅱ	125.2	26.5	101.7	35.5	46.7	14.7	−	−
Ⅲ	15.4	6.1	38.2	10.1	91.8	20.9	61.7	12.6
Ⅳ	51.6	10.2	192.5	28.8	211.7	20.6	−	−
Ⅴ	45.0	5.4	77.2	10.6	166.0	16.0	387.5	45.7
Ⅵ	40.4	10.0	112.5	21.1	86.6	11.4	89.5	11.0
Ⅶ	80.4	13.8	220.9	32.7	578.5	47.9	170.0	25.5
Ⅷ	23.0	6.4	70.0	19.8	233.0	34.0	289.0	38.2
全員	62.6	12.3	129.0	23.5	190.0	24.1	196.8	25.0

表5 「子どもの発達・子どもとの関わり」に該当する記述量の平均とその割合

（単位：字）

	1年次		2年次		3年次		4年次	
学生	記述量(字)	割合(%)	記述量	割合	記述量	割合	記述量	割合
Ⅰ	498.5	74.5	665.4	86.9	763.3	90.0	1058.5	92.0
Ⅱ	385.2	81.4	247.0	86.3	284.9	89.6	−	−
Ⅲ	214.2	85.1	296.2	78.4	408.7	92.9	451.0	92.0
Ⅳ	411.3	80.9	575.0	86.0	868.2	84.6	−	−
Ⅴ	754.9	91.1	606.2	83.4	936.3	90.4	676.0	79.7
Ⅵ	359.1	88.9	260.5	48.9	576.3	76.1	672.0	82.3
Ⅶ	540.6	92.6	553.9	82.1	885.8	73.4	446.0	67.0
Ⅷ	287.0	80.3	320.0	90.5	556.3	81.1	506.0	66.9
全員	431.4	84.7	440.5	80.3	660.0	83.6	634.9	80.6

表6 「同僚・家庭・地域との連携」に該当する記述量の平均とその割合

（単位：字）

	1年次		2年次		3年次		4年次	
学生	記述量(字)	割合(%)	記述量	割合	記述量	割合	記述量	割合
Ⅰ	132.1	19.7	38.4	5.0	16.6	2.0	134.5	11.7
Ⅱ	0.0	0.0	70.0	24.4	52.1	16.4	−	−
Ⅲ	21.3	8.5	131.4	34.8	0.0	0.0	23.7	4.8
Ⅳ	72.6	14.3	45.9	6.9	92.7	9.0	−	−
Ⅴ	162.5	19.6	56.7	7.8	95.7	9.2	122.0	14.4
Ⅵ	35.3	8.7	89.5	16.8	39.6	5.2	71.0	8.7
Ⅶ	38.5	6.6	24.3	3.6	81.9	6.8	64.0	9.6
Ⅷ	17.0	4.8	26.7	7.5	158.5	23.1	81.0	10.7
全員	59.9	11.8	60.4	11.0	67.1	8.5	82.7	10.5

にすることにある。

(2) 対象

学校支援活動の活動記録を記した８名の学生（学生ⅠからⅧ）である。

(3) 方法

本調査は、平成 20 年の 11 月から 12 月にかけて実施している。学生には質問紙によって、教師の職務に対する意識と教師の職務内容や役割に関する理解が深まった体験の内容について尋ねている。教師の職務内容や役割の理解が深まった体験については、「学校支援活動」「（学校支援活動を除く）大学の授業」「授業以外の活動」の３つの事柄に分けて尋ねている。質問形式は、選択式と自由記述式の両方を用いている。

教師の職務に対する意識では、教師志望の有無、最初に教師を志望した時期（教師志望ではない学生に対してはなぜ教師志望ではなくなったのか）、教師の職務に対する考え方の変化とその変化の内容について尋ねている。教師の職務内容や役割の理解が深まった体験は「学校支援活動」「大学の授業」「授業以外の活動」について尋ねており、それぞれ教師の職務に対する考えが変わったことや、その考えの変化の内容について尋ねている。さらに「学校支援活動」に関してのみ、活動の中で戸惑ったこと、大学の学習意欲への影響について尋ねている。

(4) 結果

各学生の教師志望の変化の有無や教師を志望した時期等は、表７の通りである。１点目は、表７に示しているように、大学３年次に教師志望を変化させた学生が３名（学生Ⅲ、学生Ⅳ、学生Ⅴ）いることである。その中で、大学在学中に教師を志望するようになった学生が２名であり、教育実習をきっかけに教師志望をやめた学生が１名いる。その他の５名は小学生から高校生までの間に教師を志望し始め、その後一貫して教師志望であることが分かる。

２点目は、表８から分かるように、すべての学生が在学中に教師の職務や役割に対する考えを変化させていることである。その内７名が、表内の下線部にあるように、変化させたきっかけを実際の教育現場を体験したことであると回答している。記述内容から教師の仕事を体験することによって、教師の学級内での役割を知り、子どもたちとの関わりの背後にその教師自身の教育計画や意図があることを知り得たことが分かる。その内の６名が教育実習の体験による影響を記述している。

３点目は、表９に示したように、教師の職務や役割に対する理解を深めた体験について「学校支援活動」「大学の授業」「授業以外の活動」のいずれにおいても、半数以上の学生が回答していることである。学校支援活動には６名が回答しており、記述内容から活動先の教師の姿を間近で見ることや自分が実際に教師の仕事を体験することが影響していることが分かる。大学の授業にも６名が回答しており、教育実習を体験することや現職の教師との関わりが影響していることが分かる。授業以外の活動には５名が回答しており、ボランティア活動やサークル活動の体験が影響していることが分かる。これらのことから、学生は在学中の多種多様な授業や活動を通して、教師の職務内容や役割に関する理解を深めていることが分かる。

４点目として、学生は学校支援活動と他の授業とを同

表7　教師志望の変化

学生	教師志望	最初に教師を志望した時期	教員を志望しなくなったきっかけ
Ⅰ	○	中学生	―
Ⅱ	○	高校2年生	―
Ⅲ	×	高校1年生	大学3年次の教育実習
Ⅳ	○	大学3年生の教育実習後	―
Ⅴ	○	大学3年生の冬頃	―
Ⅵ	○	高校1年生	―
Ⅶ	○	小学校4年生	―
Ⅷ	○	中学校3年生	―

質問紙調査の結果をもとに作成

表8　教師の職務や役割に対する考え方の変化

学生	変化の有無	変化の内容（抜粋）
Ⅰ	○	最初は私自身も無知だったので、勉強を教えたり、子どもと遊んだり、人間として大切なことも教えたりする・・・というイメージが漠然とありました。しかし、実習へ行ったり、さまざまな授業を受けたりしていくうちに、子どもに伝えるための手立てとして、声の大きさや表情、声の大きさや表情、話し方や注目のさせ方をそのときの状況に合わせて使い分けるなどの工夫を、…（略）
Ⅱ	○	大学に入るまでは、「子どもと遊べて楽しそうだな～」というイメージだったが、大学入学以後は授業や、実際の学校現場に行った際に、教員の忙しさや大変さを知った。その反面、やりがいやおもしろさを知った。
Ⅲ	○	時期：実習以前から実習後の周辺　最初（高校生時代）は、自分がやりたいことや教えたいことを自由に行うことができると思いまた、それが私の性格にもあっていると思ったが、自由にそれをやってしまうと、子どもの成長に危害を加えてしまう可能性もあると知り、私の思っていたものと違うなと思い始めるようになりました。
Ⅳ	○	はじめは、子どもにいろんなことを“教える”職業だと思っていた。世間の風当たりも強いし、大変なだけの職業だと思っていた。しかし、教育実習を行い毎日子どもたちと接するうちに、子どもたちの可能性やすごさを肌で感じた。
Ⅴ	○	教師という幅の広さを知りました。はじめは、授業や子どもたちと向き合うといった、子ども側目線の教師でしたが、授業をやるための研究や準備、事務、校務など本当に言葉で表しきれない奥の深い仕事という教師目線の教師像に変わった。時期は大学３年の教育実習以降、徐々に。
Ⅵ	○	はじめは生徒指導に関して思うことがたくさんあり授業については深く考えたことがなかったが、授業の中でも生徒指導ができると知り、授業の大切さに改めて気付くこととなった。これらは実習をきっかけに考えるようになった。
Ⅶ	○	（回答なし）
Ⅷ	○	教育実習の時、自分が授業をすることで、自分が受けてきたような同じような授業を毎日繰り返すのではないかという不安が、授業とはクリエイティブで変化と充実感のあるものだという前向きなものと変わった。

質問紙調査の結果をもとに作成

表9　教師の職務や役割について理解が深まったこと（抜粋）

学校支援活動について 6名回答
学生Ⅰ：先生方の子どもに対する働きかけ方は、いつも勉強になる。 学生Ⅱ：テストの採点などをやらせてもらい、その大変さを知った。 学生Ⅳ：子ども理解が進むと、自分なりに試行錯誤して子どもと関わったり、先生のはたらきかけを見るうちに、教員という仕事に対して理解が深まっていったような気がする。
大学の授業について（学校支援活動を除く）　6名回答
学生Ⅳ：教師の専門性について、教師という職業の複雑性、教師にはどんな資質が求められているか、自分なりに考えることができた。 学生Ⅷ：三年次に受講した学校経営論での現職教員の方を交えた意見交換や学級新聞などの資料の分析が実際の教育現場を知る上で理解が深まった。 学生Ⅵ：教育実習を終えてから受けた授業は、イメージしやすいだけに理解も深まりやすかった。
授業以外の活動について 5名回答
学生Ⅱ：ボランティアで小4～中3の子どもと夏休みキャンプに行く活動を1～4年までやった。そこには同　じく教員を目指す仲間や、社会人の方で親としての立場の考えを持っているかたなど、多様な仲間に刺激を受けた。 学生Ⅵ：サークル活動。考えは十人十色であり、一つにまとめることは容易ではない。中には自分の考えを口に出したり相談したりできない人もいる。そういう人にこそ、リーダー的存在の人が気にかけるべきで、意見を口に出させる機会を設ける必要がある。

質問紙調査の結果をもとに作成

表10　学校支援活動が他の授業に与えた影響（抜粋）

質問文：学校支援活動によって、大学での学習の意欲に影響はありましたか。
学生Ⅳ：講義を受けて学んだことを、すぐにやってみることができる場があったことは、多少ながら大学での学習意欲に影響を与えたと思う。 学生Ⅵ：学級に入ってはじめてわかる「子ども」、「学級経営」、「掲示」、「授業」など。これらのことについてもっともっと知りたいと思った。自分にはこれからどう学んだら、先生方のように立派な教員になれるのか、よく考えるようになった。

質問紙調査の結果をもとに作成

時並行的に取り組むことによって、教師の職務内容や役割に関する理解を深めていることである。表 10 からそのことが分かる。2 名が、学校支援活動が他の大学の授業の学習意欲に影響を与えたと回答している。大学の座学で学んだことを学校支援活動の場で試していることや、教師の職務を体験することによって、教師の仕事に対する関心を高めていることが分かる。このことから、教育現場の体験による学びと大学における座学の学びが互いに影響し合うことによって、双方の学習効果が高まっていることが分かる。

4．考察

以上の結果から、4 点にまとめて考察を述べる。1 点目は、学校支援活動は学生に教師の職務内容や役割に関する理解を深めさせる効果があるだけではなく、他の授業の学習効果を高めていることである。学生は活動の中で教師の仕事を体験することによって、実感を伴って教師の職務内容や役割を学び得ている。さらに、実感を伴い学び得たことによって、大学における座学の学びの理解を助けていることや活動の中で抱いた疑問や遭遇した困難な状況に対する解決策を座学に求めようとしていることも考えられる。回答には見られなかったが、座学で学んだことを活動の中で試していることも考えられる。

2 点目は、学生は学年が上がるにつれて教師の職務内容や役割に対して、気付く事柄や考える事柄が増えていることが分かる。調査 1 の活動記録から、記述量は学年が上がるにつれて増加する傾向にあることや記述内容において「教科・科目」と「授業に関する教育内容・方法」に関する記述が増えていることが分かった。また、調査 2 の結果から、学生は大学の授業や普段の生活によって、教師の職務内容や役割に関する理解を深めていることが分かる。これらのことから、学生は大学生活を通して、教師の職務内容や役割を具体的に知り、その知り得た内容を蓄積しており、また、知り得たことは新しい気付きを喚起し、そのことによって、さらに新しい知識を得ていることが考えられる。

3 点目は、学生は 4 年間の大学生活の中で、教師の職務内容や役割に対する意識を大きく転換させる時期と考えを転換させる体験を経ていることが考えられる。意識を転換させる時期は、1 年次から 2 年次にかけてであり、それは教育を受ける立場から教育を行う立場への転換であると考えられる。調査 1 の結果では、1 年次から 2 年次にかけて教師の職務に取り組む上で必要な「教科・科目」と「授業に関する教育内容・計画」に関連する記述の割合が増加していた。1 年次の、大学に入学して間も無い時期には、教育を受ける立場という意識があるため、子どもと触れ合うことを通して、子ども理解を深めることや子どもたちとの円滑なコミュニケーションを重視していることが考えられる。その後、大学の授業（例えば、教科教育法など）によって、授業者としての立場を自覚することが求められる機会が増え、2 年次には自ら授業を行うなど教育を行う立場として、教師の職務内容や役割を意識するようになっていることが考えられる。

次に意識を転換させる体験は、3 年次の 5 月から 6 月にかけて取り組む教育実習である。その体験を通して、教師の職務を学ぶ立場から、教師の職務を行う立場に転換していることが考えられる。教育実習は短期集中的に教師の職務を行うことが求められるため、現実に教師が取り組んでいる多様な職務をこなすことや教師としての役割を演じることが求められる。また、学校にいる間は教師として扱われる。これらの体験によって、学生は教師になった時の自分の振る舞いや考え方を知り、教師と

しての適性を考えることになる。

大学入学時には、教師は目指すべきものであったが、大学の授業やサークル活動を通して、次第に教師らしさを自分の一部として取り込んでいく。その後、教育実習では、集中的に学校に居続けることによって、教師としての自分を体験する。これらの一連の流れを通して、学生は大学入学時には、自分の外にあった教師らしさを、教員養成教育を受けることや大学生活を過ごしていく中で段々と自分の中に取り込み、教育実習の時には教師らしさを自分の中に有するようになっている。学生はこのような過程を経て、教師としての職務内容と役割に関する理解を深めていることが考えられる。

４点目は、学習活動としての学校支援活動の有効性である。学校支援活動は、受け入れ先の学校にとっては人手が足りない学校の教育を支援するボランティア活動である。また、学生にとっては実際の教師の仕事に取り組みながら、教師の職務内容を知ることのできる体験学習である。現在では、学習指導要領において、ボランティア活動は中学校の総合的な学習の時間や道徳、高等学校では総合的な学習の時間、公民などに登場しており、複数の学校段階の教科等における教育活動として位置付けられている[2]。今後教師になる学生が、このボランティア活動としての学校支援活動の有効性を知ることになれば、学生はボランティア活動を多様な教育実践に活用するためのアイデアを得られることが考えられる。

５．結論と今後の課題

本研究の結果から、学生は継続して学校支援活動に参加することを通して、教師としての職務内容や役割に関する理解を深めていることが明らかになった。活動を通して、学生に現職の教師と共に実際の教師の職務を体験させること、教師と話をさせること、教師が職務に取り組んでいる姿を見せることが、学生としての教師の職務内容や役割の理解を深めさせる効果を高めることが考えられる。また、学生が教師の職務内容や役割に関する理解を深める過程において、意識が大きく転換する時期と転換を伴う体験が存在することが分かった。その意識を転換する時期は、１年次から２年次にかけて生じる教育を受ける立場から教育を行う立場への転換であり、転換を伴う体験は３年次の教育実習である。教育実習では、教師の職務を学ぶ立場から、教師の職務を行う立場へ転換している。そして、学校支援活動と並行して大学の座学を行うことにより、実践的な学びと座学における学びが影響し合い、学習効果が高まることも明らかになった。一方で活動の課題として、学校支援活動は、体験に取り組むこと自体が目的になってしまうことが考えられる。学生は特定の目的も無く、ただ子どもとの上手な関わり方だけに関心を寄せているだけでは、子どもとの関わり方は上達するが、教師の職務内容や役割を理解することにつながらないことも起こり得る。教員養成教育としての学習効果を高めるために、学生に対して、活動に取り組むことによって期待できる学習効果を説明すること、活動と同時並行的にその活動の振り返りとして活動の中で抱いた疑問、遭遇した困難な状況について考える時間を設けることが必要である。さらに、その振り返りでは、学生の学びを促進させるように、活動先の教師や大学教員が教師としての職務内容や役割を学生に意識させるようなはたらきかけが有効であると考えられる。

また、本研究の残された課題として、学校支援活動が独自に持つ教育効果を明らかにすること、各学年次における学生の職務内容と役割に関する理解の深まりの様子を明らかにすることが挙げられる。今後、学習ポートフォリオのような、学生の学習の履歴を検証することにより、学生の教師の仕事に対する理解の深まりの様子を調査することが可能になると考えられる。

注

1 現在、教員養成を行う大学の半数以上では「学校支援ボランティア」「学校インターンシップ」「学校チューター」「スクールサポーター」など、様々な名称が用いられて、学校支援活動が行われている。詳細は次の資料等を参照されたい。
日本教育大学協会 学校外ボランティアの質的向上検討プロジェクト（2008）「日本教育大学協会 ボランティアと教育に関する諸問題と教育系大学・学部の取り組みについて」、山本真人・菅野文彦・塩田真吾・長谷川哲也（2013）「『学校支援ボランティア』の動向に関する実証的分析」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No21、131-142 頁、全国私立大学教職課程研究連絡協議会（2013）「全国私立大学教職課程研究連絡協議会報告書『現場体験型教員養成の実態と課題 第２報』」

2 ボランティア活動に期待される教育的な効果等に関する詳細は次のものを参照されたい。
文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』教育出版、文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』海文堂出版

引用文献

(1) 中央教育審議会 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申），2012
(2) 前田賢次「教員養成課程における「適性チェックリスト」の開発」『教育』Vol.57，No.9，国土社，2007，101-106 頁
(3) 日本教育大学協会「学部教員養成教育の到達目標検

討」プロジェクト『「学部教員養成教育の到達目標の検討」（報告）』2008
(4) 福島裕敏「弘前大学教員養成カリキュラム改革の構想・実践と効果検証の試み―前期・学校サポーター実習を通じた四年次学生の変容を中心に―」『日本教育大学協会研究年報』第 26 集，2008，105-117 頁
(5) 野呂徳治「ふれあい体験活動による教職志望学生の教職観の形成―フレンドシップ事業から学生は何を学んだか―」弘前大学教育学部紀要　第 93 号，2005，119-130 頁
(6) OECD, *Education and Training Policy Teachers Matter: attracting developing and retaining effective teachers*. 2005
(7) Interstate New Teacher Assessment and Support Consortium. *Model Standards for Beginning Teacher Licensing, Assessment and Development: A Resource for State Dialogue*, 1992, 14-34 頁
(8) Teacher Training Agency "Standards for the Award of Qualified Teacher Status and Requirements for Initial Teacher Training consultation document July 2001" <https://www.education.gov.uk/consultations/downloadableDocs/98_1.pdf>（2013 年 12 月 3 日現在）

【連絡先　望月　耕太
E-mail:okmochi@gmail.com】

Verification of the Effects of School Support on the Understanding of Teachers' Work and Role of Students of the Faculty of Education

Kouta MOCHIZUKI
Graduate School of Education Cooperative Doctoral Course in Subject Development, Shizuoka University

Abstract

The aim of this study is to investigate how being involved in school support effects the understanding of teachers' work and role of students in the Faculty of Education. We analyzed activity logs and conducted a questionnaire. The students belonged to the Faculty of Education and wrote logs after each time they participated in school support. In the analysis of activity logs, we classified each sentence into one of five categories: 1) teachers' work contents and role, 2) subjects and courses, 3) educational contents and strategies for lessons, 4) children's development and interaction with them, and 5) cooperation with colleagues, parents and the community. The analysis shows that students understand more about teaching as they progress through their college careers. The students show a strong interest in children's behavior and thought in their first two years at university. In their third year, students demonstrated an additional strong interest in educational content and materials development. The questionnaire asked students about their awareness about the profession of teaching, and their relevant activities such as school support, classes in their undergraduate program, and activities in their campus life. The analysis indicates that students feel it is useful to observe teachers at work, and deal with the challenges involved with school support to understand more about teachers' roles and the content of their work. In summary, this study shows that continuous involvement in school support has a positive effect on the understanding of the teachers' work and role of students. The students are able to understand gradually more and more about the roles of teachers.

Keywords

experiential learning, school support, pre-service teacher training, undergraduate student, professional development